

## 杜甫「詠懷古跡五首」之二

——「王昭君」像の形成と白居易の繼承——

西村 富美子

はじめに

杜甫に「詠懷古跡」と題する五首連作の詩がある。大暦元年（七六六）五十五歳の時の作で、主として長江の荊州（江陵）より上流の三峽の古跡及び蜀の劉備・諸葛孔明廟（四川省）を題材にした詩である。だが、當時杜甫は夔州（四川省奉節縣）にいたので、これらの古跡を訪れる前の自身の想像に基づく作か、後に大暦三年（七六八）長江を下ってこれらの古跡に實際に行った時に作り、後日長江の「古跡」関連の詩を一括して「詠懷古跡五首」の詩にまとめたのか、詳細は不明である。

この五首の詩はこのように制作時期、事情に問題を残すが、本稿では五首の第三首「羣山萬壑赴荆門」についての私見を論じることにはしたい。「詠懷古跡五首」の詩は、杜甫の詩の中ではよく知られている詩だが、五首の各詩について簡単にその内容を提示しておけば、

一 「支離東北風塵際」 北周の詩人庾信の古跡についての詠懷。

の詠懷。

二 「搖落深知宋玉悲」 宋玉の故宅についての詠懷。

三 「羣山萬壑赴荆門」 王昭君の古跡・昭君村についての詠懷

の詠懷

四 「蜀主窺吳幸三峽」 蜀の先主廟・武侯廟についての詠懷

詠懷

五 「諸葛大名垂宇宙」 諸葛廟・孔明についての詠懷

○

先ずこの論稿で取りあげる第三首の詩を挙げておくと、

詠懷古跡五首之三 詠懷古跡五首の三

群山萬壑赴荆門 群山 萬壑 荆門に赴く

生長明妃尙有村 明妃を生長す 尙お村有り

一去紫臺連朔漠 一たび紫臺を去れば 朔漠連なり

獨留青塚向黃昏 獨り青塚を留めて黃昏に向かう

畫圖省識春風面 畫圖しやうしき省識す 春風の面

環珮空歸月夜魂 環珮 空しく歸る 月夜の魂

千歲琵琶作胡語 千歲 琵琶は胡語を作し

分明怨恨曲中論 分明に怨恨を曲中に論ず<sup>①</sup>

「詠懷古跡五首」の詩はすべて七言律詩である。この詩の意は諸説あるが、

ならば立つ群山、多くの谷が荆門山に向かつており、そこに「明妃」の生まれ育った村が今もなおある。漢の宮殿を去ってしまふと、先はどこまでも北方の沙漠がつづいていて、ただ黃昏どきに「青塚」を留めているだけだ。

春の美しい顔は「畫圖」によつて知られたのだが、

杜甫「詠懷古跡五首」之三（西村）

腰の環珮を鳴らして月夜に空しく魂が歸漢するようなことになったのだ。千年後も琵琶にあわせた「胡語」のような歌詞で、はつきりと「怨恨」の思いを曲中で述べている。

ということであろうか。

最初の二句は、明妃の生まれ育った村（昭君村）、次の三・四句は、北漠の匈奴で没した明妃の墓「青塚」、を述べる。五・六句は、畫工の筆先による匈奴への西（北）嫁と死後魂となつて歸漢した生前・死後の非運、最後の七八句には、胡語のように聞こえる琵琶の歌詞が永遠に昭君の「怨恨」の念を曲中で語っている、という。

さらにこの詩は、前半と後半の二つに分斷することができよう。すなわち前半の四句は明妃の悲劇を象徴する「村」と北漠の「青塚」の二つの古跡、後半の四句は史實や傳説によつて伝えられる生前死後の不幸な運命と今も伝えられる琵琶の「怨恨の曲」、を述べることで、明妃への哀悼の意を表したと考えられる。

明妃は死んだが今も現存する出生地の村、北漠の地にあ

る墓「青塚」、この二つの古跡には漢土と異域匈奴の對照的な相違が存在する。さらに生前は歪曲された畫圖、死後は不本意な魂の歸漢、と百八十度轉換した生と死の不運な宿命を琵琶の曲に託した、と杜甫は詠じたのだと解釋できるであろう。

言うまでもなくこの詩は「王昭君」のことを詠ったものだが、詩には「王昭君」「昭君」でなく「明妃」の語を用い、また「明妃」が「生長」した「村」と表現し、「昭君村」の名稱は用いていない。これには杜甫の何らかの意圖があるように感じられる。<sup>②</sup>

この杜甫の詩には他に幾つかの問題が存在するようである。たとえば王昭君の墓を「青塚」というのも杜甫以前にあまり例を見ない語であり、五句目の「省識」や「春風面」などは従來の解釋では分明ではないところがある。六句目の「月夜の魂」は對語としてもあまり適切ではなく、典據あるいは前例の存在はないのであろうか。

さらに七・八句の二句には最大の疑問が残されている。歌詞が「胡語」のように聞こえる「怨恨」の念いをこめた

琵琶の曲が、『琴操』以來傳えられる王昭君自作の「怨思之歌」という通説は果たして妥當だと言えるのだろうか、等等である。

次に前半の四句、後半の四句、について順次述べていくことにする。

### 「明 妃」

先に指摘したこれらの疑問あるいは問題點に對して可能な限り筆者の私考を述べてみたいと思う。先ず「明妃」については、王昭君を「明妃」と表現するのはおそらく次に擧げる梁の江淹（字は文通）の「恨賦」（『文選』卷十六・哀傷）に見えるのが最初であろうか。<sup>③</sup>

若夫明妃去時、仰天太息。紫臺稍遠、關山無極。

搖風忽起、白日西匿。隴鴈少飛、代雲寡色。望君王兮何期、終蕪絕兮異域。

夫の明妃去りし時、天を仰いで太息するが若きは、紫臺しやうたい稍く遠く、關山極まり無し。

搖風忽ち起こり、白日西に匿る。隴鴈飛ぶこと少なく、  
代雲色寡し。君王を望むも何ぞ期あらん。終に異域  
に蕪絶す。

この「恨の賦」は、「恨み」を残して死んだ歴史上の人物を題材とする「賦」だが、秦始皇帝、漢の李陵に次いで「王昭君」を詠っている。單に「明妃」の語の先例というだけではなく晉の石崇の「王明君詞」とともに、杜甫も含めて後の「王昭君」関連の作品に影響を與えている節がある。「明妃」の語は、唐代では陳子昂の「居延海樹に鶯聲を聞き同に作る」の詩に、「明妃漢寵を失し、蔡女胡塵に没す。」の句があり、李白の「王昭君」の詩にも「漢家秦地の月、流影明妃を照らす、……漢月還た東海より出で、明妃西に嫁して來る日無し……。」や他の詩にも「明妃」の語が用いられている。更に白居易には「王昭君」を題材にした詩が多いのだが、「明妃」の語は「青塚」の詩の「何ぞ乃ち明妃が命、獨り畫工の手に懸かれる。」以外にも、「明妃」の語が見受けられる。<sup>④⑤</sup>

杜甫「詠懷古迹五首」之三（西村）

王昭君の呼稱については、「王嬙」は、『漢書』卷九・元帝紀、「琴操」「昭君怨」。『西京雜記』卷二、「歷代名畫記」卷四など。「王嬙、字昭君」は『漢書』卷九十四下・匈奴傳。「王昭君」は『後漢書』南匈奴傳。「王明君」は石崇「王明君詞」、『世說新語』賢媛篇など。「昭君」は『西京雜記』卷二、「後漢書』卷九十四・南匈奴傳、『歷代名畫記』卷四など。「昭君、字は嬙」は『後漢書』卷九十四・南匈奴傳。「明君」は『世說新語』賢媛篇などがある。また「明君」「昭君」そして「明妃」なども「樂府詩」に見えるが、「王明妃」の名稱は使われていない。<sup>⑥</sup>

「嬙」を伴うこの「明妃」は他の呼稱とは異なり皇后に次ぐ後宮の階級「妃」をあらわす語であり他の固有の名稱をあらわすのとは本質的に異なる。「明妃」の詩語は梁の江淹に始まるのだろうが、唐代に入って「明妃」の持つ意味の變化、同時に「王昭君」像に對する意識變化の一つの現象とは考えられないだろうか。漢土から異域に嫁して生涯を終えた女「王昭君」ではなく、漢王朝の後宮の「王明妃」の悲劇なのである。「明妃」の語には異民族に嫁し

た女としてより、漢帝國の後宮の「妃」として位置づける意識があつたのではないだろうか。「王昭君」に關する作品の多くが樂府詩の流れの一環として作られる中で、杜甫の「詠懷古跡之三」は七言律詩五首の一首として作られたものである。その杜甫の詩は以後の「王昭君」關連の詩に何らかの影響を及ぼした、換言すれば後代の詩人が「王昭君」像形成の規範と考へたことは想像に難くない。

ちなみに、『樂府詩集』に見える「王昭君」の呼稱に關するものは、「王明君」、「王昭君」、「明君」、「昭君」、「明妃」などがある。また「樂府題」には、これ以外に「明君詞」「昭君歎」「昭君怨」「明妃怨」があり、宋代になると歐陽修や王安石の「明妃曲」群が「樂府詩」に加わる。

『樂府詩集』には「樂府題」として「明妃曲」は無いが、「明妃曲」の詩題は唐代にもすでにあり、たとえば『樂府詩集』卷二十九に收める儲光羲の「王昭君」、王偃の「明君詞」は、それぞれ「明妃曲」四首の一首、また「明妃曲」(卷十九・相和歌辭)として『全唐詩』に見えるものである。

### 「昭君村」

先に述べたように、前半の四句は出生の「村」と死後の「青塚」について述べたものだが、詩には「尙お村有り」とのみで「昭君村」の名を記していない。だが「昭君村」の名稱は「負薪行」の詩に見えており、美人輩出の村として最後の四句に

面粧首飾雜啼痕　面粧首飾　啼痕を雜う  
地褊衣寒困石根　地褊へんに衣寒くして石根くろに困しむ  
若道巫山女羸醜　若し巫山の女羸そしゅう醜なりと道わば  
何得此有昭君村　何ぞ此に昭君村有ることを得ん

と、故意に醜女に畫かれた昭君の故事を踏まえた表現をしている。この「負薪行」の詩も「詠懷古跡」と同時期の作である。

また「大曆三年春、白帝城より船を放ち瞿唐峽を出す。久しく夔府きふふに居り、將に江陵に適ゆかんとして漂泊、詩有り、

凡そ四十韻」の長篇の詩の句にも「神女峰娟妙けんみじょうなり、昭君宅ゆうむ有無。曲留められて怨惜を明らかにす、夢盡きて歡娛を失す」と、「昭君宅」及び昭君自作の「怨惜（別）」の曲のことを詠じている。

この「昭君村」を詠んだ詩としては、白居易の「昭君村を過ぎる」の詩が最もよく知られている。「村は歸州の東北四十里に在り。」の自注がある。

過昭君村 昭君村を過ぎる（卷十一・526）

靈珠產無種 靈珠 産するに種無く  
彩雲出無根 彩雲 出ずるに根無し  
亦如彼妹子 亦た彼の妹子しゆしの如き  
生此遐陋村 此の遐陋かろうの村に生まる  
至麗物難掩 至麗にして物掩かい難く  
遽選入君門 遽かに選ばれて君門に入る  
獨美衆所嫉 獨り美なるは衆の嫉あむ所  
終棄於塞垣さいえん 終に塞垣さいえんに棄てらる  
唯此希代色 唯だ此の希代の色

杜甫「詠懷古跡五首」之三（西村）

豈無一顧恩	豈に一顧の恩無からんや
事排勢須去	事排して勢 <small>いき</small> い須く去るべし
不得由至尊	至尊 <small>し</small> 尊 <small>ん</small> に由るを得ず
白黑既可變	白黒 既に變ずべし
丹青何足論	丹青 何ぞ論ずるに足らん
竟埋代北骨	竟 <small>つひ</small> に代北 <small>たいほく</small> に骨を埋め
不返巴東魂	巴東 <small>はとう</small> に魂を返さず
慘澹晚雲水	慘澹 <small>さんたん</small> たり 晚雲水
依稀舊鄉園	依稀 <small>い</small> 々 <small>き</small> たり 舊鄉園
妍姿化已久	妍姿 <small>けんし</small> 化して已に久し
但有村名存	但だ村名の存する有り
村中有遺老	村中に遺老有り
指點爲我言	指點して我が爲に言う
不取往者戒	往者の戒 <small>かぎ</small> めを取らずんば
恐貽來者冤	恐らくは來者の冤 <small>えん</small> を貽 <small>おこ</small> さん
至今村女面	今に至るまで村女の面
燒灼成癍痕	燒灼して癍痕 <small>はんこん</small> を成すと

冒頭は「王昭君」の後宮入りの経緯から始まる。「塞垣に棄てらる」と匈奴王に遣られることを「棄」と表現する。

次に「一顧の恩」は李夫人の「北方に佳人有り、絶世にして獨り立つ。一たび顧みれば城を傾け」に基づき、「丹青」の語は「圖畫」と同じ意味で『西京雜記』等を背景とし、「巴東に魂を返さず」は、杜詩の「環珮空しく歸る月夜の魂」の昭君の「魂」だが、杜甫とは異なり「魂」の歸漢も否定する。

最後は「昭君」死後の「昭君村」の現状、「焼灼の面」の風習を語る。内容は三段階構成で、最初の八句は王昭君の故事を、次の八句は天子の意志ではなく偽作の畫圖のせいで匈奴で死し、故郷の巴東には「返魂」しなかつた悲劇を述べ、最後に昭君の死後八百年ほどの長い年月だが村の名は現存し、村の故老の口を借りて今も受け継がれている悲惨な「焼灼」の村の風習を語らせて、杜甫の詩に見える「昭君村」の實態の具體的な説明を一步進めている。

この「昭君村」の詩は、元和十四年（八二九）、江州刺史から忠州刺史に轉任の途次の作であり、また同じ年に「王

昭君」に關する詩を作っているが、「昭君村」の春景を詠じた内容である。

題峽中石上

峽中の石上に題す（卷十七・1108）

巫女廟花紅似粉

巫女廟の花は紅なること粉に似たり

昭君村柳翠於眉

昭君村の柳は眉よりも翠なり

誠知老去風情少

誠を知る 老い去りて風情の少なきを

を

見此爭無一句詩

此れを見て 争でか一句の詩無から

ん

### 「青塚」

次に、杜甫の詩の第四句の「青塚」だが、先にも述べたように昭君の墓を「青塚」と明言するのは杜甫のころからではなからうか。そのルーツは恐らく仇兆鰲も引用する

『歸州圖經』の「邊地白草多し。昭君の塚獨り青し。郷人之を思いて、爲に廟を香溪に立つ。」かと推測されるが、「青塚」の語は用いていない。李白の「王昭君」の詩にも

「青塚」の語は見え杜甫の詩と類似する點も多く、「王昭君」を詠じた詩では評價が高い。<sup>⑦</sup>

王昭君二首之一 王昭君二首の一 李白

漢家秦地月 漢家 秦地の月

流影照明妃 流影 明妃を照らす

一上玉關道 一たび玉關の道に上れば

天涯去不歸 天涯 去つて歸らず

漢月還從東海出 漢の月は還た東海より出するも

明妃西嫁無來日 明妃は西に嫁して來たる日無し

燕支長寒雪作花 燕支えんしは長えに寒くして 雪は花を作

し

蛾眉憔悴沒胡沙 蛾眉は憔悴して 胡沙に沒す

生乏黃金枉圖畫 生きては黃金に乏しくして 圖を枉

げて畫かれ

死留青塚使人嗟 死しては青塚を留めて 人をして嗟

かしむ

漢朝の長安の月、月光が王昭君を照らしている。一度玉關への道中に出てしまえば、天の果ての地でもう歸つてはこない。

漢の月は東の海から出てくるが、王昭君は西の方へ嫁してもうやって來る日もない。

北方はいつまでも寒くて、雪が花のようであり、美しい人はやつれはてて、胡の沙漠で没してしまつた。

生きていた時は黃金が無くて繪をちがつた風に畫かれ、死んでしまうと青塚を世に残して人を嘆かせる。

二

昭君拂玉鞍 昭君 玉鞍を拂い

上馬啼紅頰 馬に上りて 紅頰こうきょうを啼く

今日漢宮人 今日 漢宮の人

明朝胡地妾 明朝 胡地の妾

王昭君は玉で飾つた馬の鞍を拂い、馬に乗って紅で化粧した頬に涙を流して啼いた。今日は漢朝の後宮の宮

女だが、明日は胡の地の妾となるのだ。

杜甫の詩は、古跡「昭君村」を主題とするが、李白の詩は「樂府詩」であり「王昭君」の悲惨な生涯が中心である。漢土出發と胡地での死没、生と死の重なる悲劇に重點をおいている。しかし詩中には「青塚」以外に杜甫と同じく「月」「圖畫」「畫圖」「青塚」「胡」また「明妃」が用いられ、西嫁（北嫁）の事情を詳細に描いている。第二首は出立の様子と今日明日の急轉直下の運命の激變を簡潔鮮明に表現する。ただし残念ながら李白の詩の制作時期は分明的でない。また「樂府詩」でもあるので、杜甫の「詠懷古跡」との前後については決めがたいものがあるが、李白・杜甫のころには「王昭君」に關するイメージの形象化がかなり定着していく方向にあったと言えないだろうか。<sup>⑧⑨</sup>

なお王昭君の墓は後に擧げる白居易の「青塚」の詩の中にも見えるように「昭君墓」と稱されることもあり、先立つものとして常建に「昭君墓」の詩がある。<sup>⑩</sup>

「王昭君の墓」は杜佑の『通典』卷一七九・州郡九に見

えるのが最初であろう。「麟徳元年、雲中都護府を改めて以て單于大都護府とす。縣一。」（縣は金河縣）とあり、「長城有り、金河上城、紫河及び象水有りて、又た南流して河に入る。李陵臺・王昭君墓。」と、金河縣に「李陵臺」「王昭君の墓」のあつたことを記している。

「明妃」のところで觸れたが白居易に昭君の墓「青塚」を詠んだ詩があり、この「諷諭」の意がこめられた三十二句の長篇の詩は、王昭君の墓を詠じた詩としては最も詳細である。

青塚

（卷一・122）

上有飢雁號

上に飢雁の號ぶ有り

下有枯蓬走

下に枯蓬の走る有り

茫茫邊雪裏

茫茫たる邊雪の裏

一掬沙培塿

一掬の沙培塿さほうろう

傳是昭君墓

傳う 是れ昭君の墓と

埋閉蛾眉久

蛾眉を埋閉すること久し

凝脂化爲泥

凝脂は化して泥と爲り

鉛黛復何有	鉛黛	復た何か有る
唯有陰怨氣	唯だ陰怨の氣有り	
時生墳左右	時に墳の左右に生ず	
鬱鬱如苦霧	鬱鬱として苦霧の如し	
不隨骨銷朽	骨に隨つて銷朽せず	「
婦人無他才	婦人 他才無し	
榮枯繫妍否	榮枯 妍否に繫かる	
何乃明妃命	何ぞ乃ち明妃が命	
獨懸畫工手	獨り畫工の手に懸かれる	
丹青一註誤	丹青 一たび註誤し	
白黒相紛糺	白黒 相い紛糺す	
遂使君眼中	遂に君の眼中をして	
西施作ほ母	西施を媼母と作さしむ	
同儕傾寵幸	同儕 寵幸を傾け	
異類爲配偶	異類 配偶と爲る	
禍福安可知	禍福 安んぞ知るべけん	
美顔不如醜	美顔 醜に如かず	「
何言一時事	何ぞ一時の事を言わん	

杜甫「詠懷古迹五首」之三（西村）

可戒千年後	千年の後を戒むべし
特報後來姝	特に後來の姝に報ず
不須倚眉首	須らく眉首を倚るべからず
無辭插荆釵	辭すること無かれ 荆釵を挿み
嫁作貧家婦	嫁して貧家の婦と作るを
不見青塚上	見ずや 青塚の上
行人爲澆酒	行人 爲に酒を澆ぐを

昭君の墓を、詩の題には「青塚」また詩の中では「昭君の墓」と稱している。

茫茫たる邊地の雪の中の砂の小山「沙培塿」は「昭君の墓」でその墓上に「陰怨の氣」が立ちこめていたという。

次には、畫工の手に始まった昭君の不運の顛末を具體的に述べて、禍福の點では美女が醜女に勝るとは限らない、そのよき典型が邊地の「青塚」に眠る昭君であり、後宮入りして「青塚」となるよりは「貧家の婦」となるほうがましだ、と警告を發している。白居易はこの詩を「諷諭」に分類している。

ここに挙げた三首の詩、「昭君村を過ぎる」は「感傷」、「峽中の石上に題す」は律詩（絶句）、「青塚」は「諷諭」の部類にそれぞれ配しているが、同じ時期（元和十四年）に江州から忠州への量移の旅の途中で作られた詩であり、杜甫また李白の詩により順次形成された「王昭君」像を繼承していることは明白だと言える。

「書圖」と「月夜魂」

杜甫の「詠懷古跡」の詩の後半の四句の最初は、諸注に言うように『西京雜記』『世說新語』に見える「書圖」また「畫工」の話がその背景にある。第六句には、庾信の「明君詞」（『樂府詩集』卷二九相和歌辭）の「胡風骨に入りて冷ややかに、夜月心を照らして明らかなり、方に琴上の曲を調べて、變じて胡笳の聲に入る」を仇兆鰲は擧げている。不明確ではあるが關連性を完全には否定できない、という程度だが他に適切な先例を見いだすのは困難である。「月夜の魂」の表現には他に何か據る所があるのではないかというのが筆者の未解決の課題である<sup>⑪⑫</sup>。

最後の二句については、そのキーワードとなる「琵琶」「胡語」「怨恨」「曲中」から、その背景にあるのは晉の石崇の「王明君詞」、晉の孔衍の『琴操』と考えるのは容易であろう。前者は『文選』卷二十七・「樂府」に「王明君詞」として、『玉臺新詠集』卷二及び『樂府詩集』卷二十九・相和歌辭には「王明君」の題により載せている。後者の『琴操』は『樂府詩集』卷五十九・琴曲歌辭、「昭君怨」の「樂府解題」に見える。王昭君の経歴と服毒死の結末とともに「昭君 帝の始め遇せられざるを恨み、乃ち「怨思の歌」を作る」と記す。「怨曠思惟の歌」また「昭君怨」（『樂府詩集』王嬪）といわれる次に擧げる四言の古詩である。

昭君怨	王嬪
秋木萋萋	秋木 萋萋たり
其葉萎黃	其葉 萎黃す
有鳥處山	鳥有り 山に處る
集于苞桑	苞桑に集まる

養育毛羽

毛羽を養育し

「形容生光」

形容 光を生ず

既得升雲

既に雲に升るを得

上遊曲房

上 曲房に遊ぶ

離宮絶曠

宮を離ること絶曠

身體摧藏

身體 摧藏し

思念抑沈

思念 抑沈し

不得頡頏」

頡頏するを得ず

雖得委食

委食するを得と雖も

心有徊徨

心徊徨する有り

我獨伊何

我獨り伊れ何ぞ

改往變常

往を改め常と變わる

翩翩之燕

翩翩たる燕

遠集西羌」

遠く西羌に集まる

高山峨峨

高山 峨峨たり

河水泱泱

河水 泱泱（あうあう）たり

父兮母兮

父よ母よ

道里悠長

道里 悠長たり

嗚呼哀哉 嗚呼 哀しいかな

「憂心惻傷」 憂心 惻傷す

二十四句の長篇詩だが、前半十二句は漢宮にいた當時に帝に顧みられなかった時のこと、後半十二句は胡の地匈奴にあつて故郷の父母に對する望郷の悲傷の情を詠う内容である。

この「怨思之歌」（「怨曠思惟の歌」）が王昭君の自作かどうか、また杜甫が「詠懷古跡」の末句にいう「怨恨曲」はこの「怨思の歌」を指すのかどうかは疑問のあるところだが、必ずしも特定の曲（詩）を想定しなくともよいと考えられることも可能であろう。ただ『分門集註杜工部集』、また『杜少陵詳註』など、ほとんどの注釋書はこの「怨思の歌」（「怨曠思惟の歌」「昭君怨」）を擧げている。筆者の疑問は、二十四句の長篇詩ではあるが「古詩十九首」の詩の調べに類似するものを感知するからである。

おわりに

杜甫の「詠懷古跡五首」の詩は、「王昭君」にまつわる事跡を題材に詠まれた詩であるが、後の「王昭君」関連の詩に與えた影響の大きさは計り知れないものがある。前漢の元帝の時代に起きた特殊な歴史的事件は實際の史實であると同時にその特殊性ゆえに文學の世界の題材として發展していき、時代を追うごとに「王昭君」像は膨張していった。六朝時代には正史の記述をはるかに越えて多種多様の「王昭君」像の擴張があつたことが豫想される。晉の石崇の「王明君詞」、孔衍の『琴操』、葛洪の『西京雜記』、宋の劉義慶の『世說新語』等の「王昭君」像を経て、唐代では初唐のころから「王昭君」を題材とする詩が詠まれていったが、それらの詩の中で杜甫の「詠懷古跡」の「王昭君」の詩は、これまでの「王昭君」詩の總括的な詩作であつたように考えられる。律詩の詩型での「王昭君」詩が特徴の一つである。二句ごとに四つの事項が詠みこまれて、過去の「王昭君」像を簡潔明瞭に網羅した律詩である。そ

してこの「詠懷古跡」の詩によって形成された「王昭君」像が繼承されて題材提供の分野がさらに擴張されていった。その最初の繼承者は白居易ではないだろうかと考えている。白居易の「諷諭」の詩が杜甫の社會的世相を對象にした詩の影響を受けている面についての論争は數多いが、「王昭君」像の繼承者であることも杜甫の影響を受けた白居易の一面であることを提起しておきたいのがこの小論の主旨である。

註

- ① 底本は「分門集註杜工部詩」を用いた。一、二、三の詩は本書では「懷古」(卷十三)の門、四及び五の詩は「陵廟」(卷六)の門に分けて收める。仇兆鰲の「詳註」には誤字がかなりあるので、多少の誤字はあるがこれを底本とした。
- ② 「昭君村」は「負薪行」の詩に、また「昭君宅」は「大曆三年春……」の詩に見えている。なお、「明君」は、晉の司馬昭の名を避けて「明君」と改められたものである。
- ③ 王洙もこの詩を挙げる。
- ④ 李白の「陽春を愁うの賦」に「明妃玉塞、楚客楓林」。また「于闐の採花」の詩に「于闐採花の人、自ら言う花相似た

りと、明妃一朝西して胡に入り、胡中の美女羞多くして死す。乃ち知る漢地に名姝多く、胡中に花無し。方比す可き無し」など。

⑤ 白居易の「昭君怨」の詩に「明妃の風貌最も娉婷たり、合に椒房に在りて四星に應ずべし」。また「春琵琶を聴き、兼ねて長孫司戸に簡す」の詩にも「四絃琵琶の聲に似ず、……舌頭の胡語苦だ醒醒たり、……、明妃の虜廷を厭うを訴うるに似たり」とある。

⑥ 『漢書』卷九・元帝紀に、「元帝の竟寧元年春正月、呼韓邪單于來朝す。掖庭の王嬙に詔して、閼氏と爲す」。『琴操』〔樂府詩集〕卷五十九・琴曲歌辭に「昭君怨」王嬙。『漢書』卷九十四・匈奴傳に「竟寧元年、單于復入朝す。禮賜初めの如し。衣服錦帛絮を加う。皆黃龍の時に倍す。單于自ら言う、願わくは漢氏に婿たりて自ら親しむ。元帝、後宮の良家の子王嬙、字は昭君を以て單于に賜う。『後漢書』卷八十九・南匈奴傳に「知牙師なる者は、王昭君の子なり。昭君、字は嬙、南郡の人なり。初め、元帝の時、良家の子を以て選ばれて掖庭に入る。時に呼韓邪單于來朝し、帝、敕して宮女五人を以て之を賜う。昭君宮に入りて數歲、御せらるるを得ず、悲怨を積もらせ、乃ち掖庭に請いて行くことを求めしむ。呼韓邪單于大會を辭するに臨み、帝、五女を召して以て之を示す。昭君、豊容靚飾、漢宮を光明し、顧影裴回して、左右を竦動す。帝、見て大いに驚き、意之を留めんと欲す、而れ

杜甫「詠懷古跡五首」之三（西村）

ども信を失うに難し。遂に匈奴に與う。二子を生む。呼韓邪の死するに及び、其の前の閼氏の子代わりて立ち、之を妻にせんと欲す。昭君上書して歸ることを求む。成帝勅して胡俗に従わしむ。遂に復た後の單于の閼氏と爲る。『西京雜記』卷二、「畫工棄市」に、「獨り王嬙のみ自ら容貌を待みて、與うるを肯んぜざれば、工人乃ち醜く之を畫き、遂に見ゆるを得ず。後に匈奴入朝して、美人を求め閼氏と爲さんとす。是こに於いて、上、圖を案じ、昭君を以て行かしめんとす。『世說新語』賢媛篇に「王明君姿容甚だ麗わしく、志苟も求めず。工遂に毀ちて其の狀を爲す。後匈奴來たり和し、美女を漢帝に求む。帝、明君を以て行に充つ。石崇「王明君詞」〔文選〕卷二十七・樂府上。『樂府詩集』卷二十九・相和歌辭、樂府題に「王明君詞」「王昭君」「明君詞」など。卷五十九・琴曲歌辭、樂府題に「昭君怨」「明妃怨」などがある。

⑦ 『分門集註杜工部詩』には、「杜曰く、單于既に死し、子達立つ。昭君達に謂いて曰く、將に漢爲らんか、將に胡爲らんか。曰く胡爲らん。是に於いて昭君服毒して死す。單于國を擧げて之を葬る。胡中に白草多くして、此の家獨り青し。前代の詞人爲に歌詩を作りて以て之を申う。」と杜氏の説を引用している。

⑧ 『樂府詩集』卷二十九・相和歌辭にも收める。

⑨ 王昌齡の「箜篌引」に、「一遷客有りて高樓に登る、言わず寐ねず箜篌を弾く。弾きて薊門桑葉の秋を作す、風沙颯颯

たり青塚の頭。<sup>はら</sup>」(『樂府詩集』には未收であり、制作時も不詳)、また僧皎然の「王昭君」の詩にも「黃金買めず漢宮の貌、青塚空しく埋む胡地の魂」と「青塚」の語が見える。<sup>もと</sup> (『樂府詩集』卷二十九所收)。

⑩ 常建の「昭君墓」の詩に「漢宮豈に死せずや、異域に獨り没するを傷む。……共に恨む丹青の人、墳上に明月を哭す」という。

⑪ 注⑥の『西京雜記』、『世說新語』。

⑫ 仇兆鰲は庾信の詩題を「昭君詞」とする。

※ 「昭君村」及び「王昭君の墓」は現在も存在し、「昭君村」は今の湖北省興山縣の東北、巫峽の東岸にあり觀光の名所になっている。「王昭君」の墓は現在の內蒙古自治區呼和浩特市玉泉區の南郊、黑河の南岸にある。一九七〇年代に再改築されたもので、王昭君及び呼韓邪單于の馬上の青銅の塑像があり、陵墓公園になっている。